

「そのピアス、いね。どうしたの？」
夕闇が訪れた頃、デザート待ち合わせにやってきた彼女の尖った耳に、見慣れないピアスが輝いていた。青から透明へのグラデーション。
「さっきバザールで買ったの。空なんだって」「えっ？」
驚いてしまった。狼男の僕はともかく、彼女は吸血鬼。彼女の耳に光るピアスはどう見ても星の空の色だ。目の光は命に関わる危険なものなのだけど、大丈夫、なの？
「見て見て、鑑定書も付いたの」
見せてくれた鑑定書には採掘場所が書いてあった。世界の果ての境界の空、なんだそだ。発行は空色探検協会とある。
「星の空みたいだけど、大丈夫なの？ その、体とか」
「見たときにほとんどなかったから大丈夫なんじゃないかな」
あの行商人は絶対ニングンだったわー、なんて言う。僕の心配などお構いなしに。まあそういう楽天的なところに魅力を感じているわけでもあるので、ここは僕が飲みこむべきだろう。
「ニングンって初めて見たよ！」
「なんでニングンだと思っただの？」
「だっつて、と彼女は言う。
「あの行商人を見たとき、すごくお腹が減るのを感じたんだもん！」
「ほはは、なるほどね」
ニングンを見たことのない彼女だけれど、本能的に《食料》だと感じたとのことだ。けれど彼女はその行商人を襲わなかつたし、僕だつて、目の前にニングンの女が現れても襲つたりしない。僕たちはそんなに野蠻じゃない。
「じゃあお腹の準備は万端つてことだね」
問いかけるとうらふふ、と恥ずかしそうに笑う。今日のデザート

は話題のスイーツを出すカフェに行こうねって話をしていたんだ。僕たちは、確かに太古はニングンを襲つて食べていた時代もあるけれど、普段はニングンたちと(たぶん)そんなに変わらない食生活をしていると思う。スパイスとか香草とかに苦手なものが多いはあるので、ニングンたちから見たら刺激の少ないものばかりだろうけれど。

「ニングンのやることつてほんと面白いよね」

目的の店に向かう道すがら、彼女が言う。

「魔法がニングンに伝わったのつて、ほんの数百年前なんですよ？」

数百年前。僕たちにとって親たちが若かつた時代の話だ。ひよんなことでニングンにも魔法が伝わつて、ニングンたちはその魔法と、もともと持っていた機械技術でいろいろとへんなものを作り出してた。そんなへんなものの一部は、僕たちが住んでいる辺境の町にもたまに入つてくる。彼女がピアスを買つた行商人みたいな存在によつて。バザールにはときどきだけけれど、遠くから来る行商人がいる。

「空を掘削してアクセサリーにしようなんてよく考えたよね」

「ニングンらしいと言えば、ニングンらしいのかもしれないけどね」

「機械嫌な彼女と連れ立つて歩いていると僕も気持ちがあうまうきしてくる。空のピアスは、彼女にとっていい買い物だつたのだろう。あんまり無駄遣いをするタイプでもないんだ。」

ニングンたちに魔法が伝わつて、代わりに彼らの貨幣経済つてやつが僕ら魔族に伝わつてきて、だから僕たちも今はニングンみたいに仕事をしてお金を稼いでいる。彼女は書類の清書をする仕事をしているし、僕は物を運んで手間賃を貰う仕事をしている。ニングンみたいに新鮮な食べ物を食べ続けないと死んでしまうわけではないから、あんなに毎日毎日働くわけじゃない

いけれど、それでもお金を出してでも欲しいものだつてある。

「ついた、ここだね」

「わあ、可愛いお店！」

メルヘンチックな白い建物は、小さいけれどお城を模しているようだった。カラフルな花たちが色を添えている。中に入ると女の子ばかりだった。ちよつとした気恥ずかしさを感じる。

「これだね、ネチヨコレートパフエ」

給仕人に《ネチヨコレートパフエ》を二つ頼んだ。彼女が顔を寄せてくる。

「ねね、これもニングンの発明したデザートなんだよね？」

わくわく顔の彼女がとても愛らしい。そうだよ、と返して彼女の頬に触れる。

「初めてのものを一緒に試す相手が君で嬉しい」

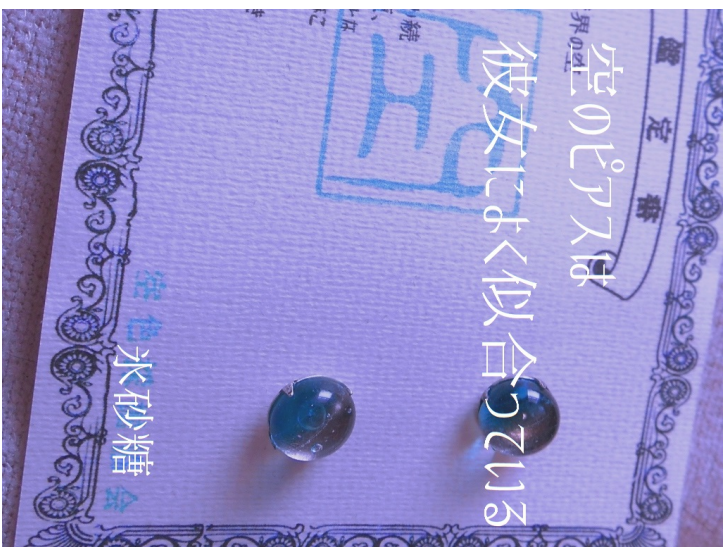
彼女が頬を赤らめる。

「世界の果てつてどんなところだろうね」

さっきの鑑定書を思い出してつぶやく。

「君と一緒にたつたらどこだつて、こんな田舎の町だつて羨敵な場所なんだけどね」

彼女は照れくさそうに、耳たぶの青いピアスを撫でている。



どうもどうも、氷砂糖です。お読みいただきありがとうございます。このお話は、先日イベントでお迎えした、ガラスのピアスから妄想したものです。表紙の写真、七歩さん (@naholograph) という方の作品です。写真はあまり巧くない加工を施してしまつていますが、現物は素敵に透き通った青と透明がとてもきれいです。イチャラブが書きたいなあと思つていてこんな感じになりました。あんまりイチャラブしてない気もする。ではでは、またどこかでお目にかかれましたら、よろしくお願ひ致します。

空のピアスは

彼女によく似合っている

2017.08.06 氷砂糖